

論文審査の結果の要旨

| | | | |
|--|--------------------------------|-----|-------|
| 報 告 番 号 | 甲 第 1027 号 | 氏 名 | 樋口佳代子 |
| 論 文 審 査 担 当 者 | 主 査 中山 淳 副 査 菅野 祐幸 ・ 宇佐美 真一 | | |
| <p>(論文審査の結果の要旨)</p> <p>唾液腺の <u>M</u>ammary <u>a</u>nalogue <u>s</u>ecretory <u>c</u>arcinoma (MASC、乳腺相似分泌癌) は 2010 年に Skálová により提唱され、乳腺分泌癌同様の組織像と遺伝子変異— t(12;15) (p13;q25) <i>ETLV6-NTRK3</i> 転座により形成される融合遺伝子を有するが、従来の腺房細胞癌の一部が MASC に相当する可能性が示唆されている。しかし細胞像に関する知見は確立されていない。</p> <p>そこで過去に腺房細胞癌と診断された症例のホルマリン固定パラフィンブロック (FFPE) を用いて RT-PCR 法により <i>ETLV6-NTRK3</i> 融合遺伝子の検索をおこない、融合遺伝子陽性で MASC と考えられた 7 例について細胞像を解析した。</p> <p>その結果、樋口は以下の結果を得た。</p> <p>1. 臨床病理学的所見：症例の男女比は 3:4、平均年齢は 51.6 才、5 例が耳下腺、1 例が顎下腺、1 例が副耳下腺、腫瘍径は平均 1.8cm であった。全例とも病期 I、経過観察期間内無再発。</p> <p>2. 細胞学的所見：検体は細胞成分に富み、結合性の低下した合胞体様細胞集団とヘモジデリンを貪食した組織球、粘液様物質を認めた。また分泌物をいれた濾胞状集団、孤在性細胞が多くみられ、乳頭状集塊も認められた。細胞は小型から中型、核形不整、核小体はめだたなかった。細胞質は空胞状で zymogen 顆粒はあきらかでなかった。</p> <p>3. 組織学的所見：従来の腺房細胞癌の増生パターンのうち、小嚢胞型増生が全例、濾胞型増生は 4 例、乳頭嚢胞型増生は 2 例、充実性増生は 1 例にみられた。Diastase-PAS、Alcian blue 陽性の粘液が管腔内にみられ、diastase-PAS 陽性の zymogen 顆粒は明らかでない。免疫組織化学では mammaglobin、S-100 protein、vimentin、MUC1 が全例陽性、amylase 陰性、p63 は 2 例で一部に陽性、ki67 index は平均値 7.8% であった。</p> <p>4. 分子遺伝子学的所見： PT-PCR では全例に <i>ETLV6-NTRK3</i> 融合遺伝子が確認された。</p> <p>これらの結果より MASC の細胞像では、ヘモジデリンを含む組織球や粘液を背景に、異型に乏しく空胞状の細胞質を有する腫瘍細胞が濾胞状あるいは乳頭状集団で出現し、zymogen 顆粒はあきらかではないという特徴があることが判明した。よって主査、副査は一致して本論文を学位論文として価値があるものと認めた。</p> | | | |